



## へき地・複式教育における教員研修のあり方： 教員養成大学の役割をさぐる

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-03-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/9836">https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/9836</a>

## へき地・複式教育における教員研修のあり方

— 教員養成大学の役割をさぐる —

### 1. 沖縄県のへき地教育と教員研修

— 川口正一（沖縄県立総合教育センターへき地教育研究室研究主事）

みなさんこんにちは。「沖縄県のへき地教育と教員研修」という題で発表します。最初に沖縄の様子を少し紹介してから話に入っていきたいと思います。

沖縄県はご存じのように与論島を境目として南側の諸島地域になります。北海道には教育局が14局あるとのことですが、沖縄県では6教育事務所管内という体制です。ですから教員採用も各地区採用となっており、6地区に分かれて採用になります。

沖縄県全体で130万人の人口ですが、その90%が沖縄本島に集中しています。国頭地区、沖縄市のある中頭地区、人口30万人の都会で空港のある那覇地区、島尻地区、宮古地区、石垣島を含む八重山地区の6つの地区で構成されています。県全体で40程の島々があり、ハイビスカスが咲いて自然豊かではありますが、7月から9月にかけて、また10月でも台風が来て、家も吹き飛ばされるというような強風の吹くところです。観光産業で生きている沖縄ですので、年間400万人以上の観光客が沖縄を訪れます。

沖縄県の教育は、教育推進計画という10年間のプランがあり、それをより具体化した3年間ごとの計画に基づいて推進されています。

3年間のプロジェクトの教育推進計画は、創造性、国際性、人材育成ということで、その中で主要施策として、生涯学習推進、学校教育の充実、国際化情報推進、青少年の健全育成、社会教育の充実、スポーツ振興、文化振興、教育制度の充実という8つの大きな柱があります。この柱の一つである学校教育の充実を図るため、学校教育目標指導努力点が設定されています。この努力点とは、小学校、中学校、高校ではこのような教育をして下さいという指導の重点事項です。小学校、中学校の学校教育目標指導努力点として、「へき地教育の充実」が掲げられています。

#### 【沖縄県のへき地教育の状況】

沖縄県には公立の小学校が280校あり、そのうち103校がへき地指定校です。中学校は、公立280校のうち76校がへき地指定になっています。特に、西表島や与那国島などを含む八重山地区は、

---

\*これは、平成15年2月27日に開催されたへき研ワークショップ「へき地・複式教育における教員研修のあり方」の午後の部における報告（3件）および研究討論の記録である（職名は当時）。なお、このワークショップの午前の部における基調講演（有馬毅一郎島根大学名誉教授）の記録は、以下の報告書を参照されたい。

『へき地・複式教育における「教員研修」に関する資料』北海道教育大学へき地教育研究施設、平成15年度大学改革推進プロジェクト「へき地・複式教育における教員研修に関する調査研究」報告書、平成16年3月。

小学校、中学校ともに5級地という厳しいところも少なくありません。県全体では、宮古地区、八重山地区を中心に、3級地以上の指定校が多い状況にあります。

複式学級は、国頭地区と八重山地区に集中しています。国頭の小学校22校、八重山の小学校23校が複式学級を設置しており、県全体では、小学校66校、中学校22校が複式学級設置校です。

複式学級数の推移ですが、複式学級数も、全学級数に占める複式の割合も徐々に増える傾向にあります。全国に比較しても割合が高く、沖縄県では複式教育の充実を図ることが大きな課題になっています。そのような状況から、学校教育目標指導努力点として掲げられているのです。

### 【沖縄県のへき地・小規模・複式教育の課題】

へき地・小規模・複式教育の現状と課題ということで、学校現場の先生方は、どの様に考えているのかを調査しました。平成4年度と13年度の調査結果を比較して、課題の変化の有無を検討してみました。調査は、複式学級設置校の校長及び教諭、1学級10数人程度の小規模校の校長及び教諭を対象に実施しました。

調査結果から、特に、10年経っても変わらない課題に着目し、どう解決していくかが重要であると考えました。平成4年度も13年度も、学校経営上の力点として高いのが、「教育目標の具現化」です。また、学校経営に影響を与えていると考えられているプラス条件として、身近な「自然」と「地域の教育環境」が挙げられていますが、これも両年度とも変わっていません。身近な自然や地域環境をうまく活かして学校教育を進めていくことは、特色ある学校づくりの上からも重要だと考えられます。一方、学校経営に影響を与えているマイナス条件は、両年度の選択肢が若干違うので厳密ではないのですが、平成4年度の調査では「児童・生徒数」と「複式学級」がマイナス要因、平成13年度では36.5%の先生方が「複式学級」をマイナス要因と考えています。

沖縄県の場合、へき地・複式学級設置校への勤務は通常3年間となっています。ですから、1年目はへき地・複式に困惑し、2年目で学校が分かり、3年目でようやく出来るようになると転勤になるという繰り返しで、非常に困った状況です。

そのようなことが影響しているかも知れませんが、各学校が特に重視しているのは教科指導です。学校の研究課題として取り組みたい事項も、やはり「効果的な学習指導法」などの教科指導面を重視する傾向にあります。小規模校では児童生徒数が少人数なので個別指導がしやすいという良い点がありますが、多人数集団による学習が出来ないという課題もあります。そこで、合同学習は非常に効果があるということで、平成4年度も13年度も合同学習を特に重視している傾向が見られました。

また、校内研修を進める上での問題点については、研修時間の確保が難しいということ。例えば、複式学級のある学校では、2学年分の教材研究をしないといけないことから、校内研修の時間を取るのが困難であるという結果が出ました。

複式学級の設置については、一刻も早く全学年単式学級にすべきであるという意見が先生方の中には多いようです。現実的には条例の下で簡単に動かすことは出来ませんので、そのような要望をしつつも、複式の良さも見つけて何とかやっけていこうと、指導改善を図りながら進める必要があるように思います。宮古地区のある村の教育委員会では、複式学級は大変だということから、村独自で非常勤講師を雇い入れて複式学級を解消しているという話を聞きました。このように、

市町村の教育委員会で予算を確保し、複式学級設置校への派遣という形で対応している市町村もあります。

へき地教育施策への要望について調査結果を見てみると、複式指導に関する研修の充実があります。複式指導についての研修をしないまま現任校に赴任する場合はほとんどですし、赴任後も校内で複式指導について研修を行った例は50%もないのです。

去年、北海道教育委員会と北海道教育大学で出版された複式指導の手引きがあると聞き、校内研修でも活用できるのではないかと感じました。我々は、学校のニーズに合った資料を提供して行かなければならないと思います。沖縄県も教育実践のワーク指導に関する資料や学習指導案などは蓄積してきたのですが、初めて複式学級を持つ先生への手引きになるような物があると心強いと感じました。

アンケート結果で注目したいのは、複式学級の担任としてどのような研究を重要と考えるかということです。多くの先生が、子供達が自ら学ぶ意欲や態度を育むような指導の研究が大事であると考えています。次に、直接指導の研究、教科書研究と続きますが、やはり一番の課題は自己学習の指導です。このことについては、北海道で生まれたガイド学習に影響を受けています。本土復帰前から研究をしていました。特に北海道でガイド学習を研修し西表島に普及した方がいます。現在70歳位のこの方が現職時代に指導していたガイド学習によって、子供一人ひとりが自ら学ぶことで驚くほど成長していったそうです。西表島の小学校では、退職後もこの先生と実践研究を進めていると聞いています。

### 【沖縄県立総合教育センターのへき地教育への取組み】

#### (1) 各種研修講座の開催

「小学校複式学級担任講座」は、複式学級担任に初めてなった先生方を対象とするもので、国頭・中頭・島尻・那覇の4地区で実施しています。年度の早い時期の5月に第1回を実施し、講義、実践発表、授業参観、情報交換会を行っています。第2回は8月に実施しています。

「小・中へき地教育講座」は、全県から小学校20名、中学校10名を募り、学習報告会、発表会を行っています。

「へき地・複式設置校赴任前基礎講座」は、複式学級設置校への勤務を予定している教員を対象とするもので、転勤内示後の3月に実施しています。今年は23名が自主的に参加しています。

移動教育センターという事業も行っています。宮古地区、八重山地区は沖縄本島から離れていますので、出前講座みたいなものを行っています。両地区の教育事務所と相談しつつ、15年度は7講座を予定しています。

#### (2) 共同研究と長期研修

宮古、八重山の両地区の先生方と教育センター主事とで、テーマを設定して共同研究も進めています。主事は年4回その地区に行って研究会を持つのですが、年間10回以上は先生方自身で研究を進めています。公開授業研究会の開催と教育実践事例集の刊行も行っています。

教育センターにおける長期研修には、1年研修と半年研修があり、遠方からの研修員はセンター内の寮で生活しながら研究を進めています。長期研修員の実践研究に際しては、教育センターから近い宮城島の小学校を連携校として、検証授業を行う場としています。長期研修員は研修の成

果としてレポートを書くことになっています。

### (3) IT活用の促進

教育センターにIT教育センターが設置され、研修員とともに、授業で使えるソフトを開発するプロジェクトが進行中です。県全体で同じソフトを各学校が導入することができることを目指しています。各学校で作ったソフトもライブラリー登録出来るように進めています。

また、研修講座の様子をダイレクトにへき地校のパソコンから見られるようなシステム作りも進めています。更に、教育センターも15年度から土曜日も開けて、現場の先生の教材研究や様々な問い合わせにも対応していくことになりました。

### (4) 大学との連携

沖縄県のへき地教育研究に向けて、琉球大学教育学部と教育センターへき地教育研究室とが連携していく計画を進めています。準備事務室を作って平成16年度から開始する予定です。

## 【へき地校の教員人事】

沖縄県では、へき地校への勤務義務があります。昔は新人はみんな離島へき地勤務だったのですが、昭和61年頃から初任者研修の充実を図ることが打ち出され、それ以来、最初の赴任地はへき地校にはしません。ただ、採用時にへき地校への勤務義務もあることを確約しています。ですから大きな学校で3年から5年勤務した後は、へき地校勤務と言うのが一般的です。管理職試験の受験資格にも、へき地校勤務経験をあげています。

これで私の発表を終わります。

## 2. 北海道のへき地教育と教員研修

### 一 永澤 篤（北海道立教育研究所教育開発部研究研修主事）

北海道立教育研究所の永澤でございます。北海道における教員研修について、とりわけ複式教育に関係あるものを中心にお話したいと思います。

私は研修講座などでよく意味も分からずグローバルという言葉を使っていたのですが、先程から島根大学名誉教授の有馬毅一郎先生や沖縄県の川口正一研究主事からとてもためになるお話を頂きまして、どうも自分は北海道という枠の中だけで色々考えていたのではないかと感じました。

これからお話することは北海道教育委員会、特に私が所属しています北海道立教育研究所の教員研修が中心となります。北海道の研修について考える際に、まず、北海道教育大学へき地教育研究施設を始めとする北海道教育大学の皆様と、北海道へき地複式教育研究連盟の皆様の研究の積み重ねが礎となり、更に各へき地複式校に勤務する先生方の実践、ご苦労によって北海道のへき地教育の充実が図られています。このことをお伝えした上で、北海道教育委員会の取り組みについてお話させていただきたいと思います。

時代の変化と共に、北海道教育委員会や道立教育研究所が教員研修に果たす役割も少しずつ変化してきました。今日は、今後どのような役割を果たしていくかについても考えていきたいと思っています。

教師であれば誰しも、子供が目を輝かせて取り組むような授業をしたいと思うことでしょう。

そのため先生方は日々努力を重ね指導の工夫改善に努めている訳ですが、なかなか授業というのは奥が深くてそう簡単にうまく行くものではありません。この授業を実践する力が教員の基本的能力となるのですが、教員に求められる能力は、社会の変革と共に変わってきたように思います。

### 【教員研修の体系化】

1997年の7月教育職員養成審議会第1次答申を受けまして、北海道立教育研究所と北海道教育大学の連携事業による共同研究で、今後教員に求められる資質・能力をまとめました。

この共同研究をもとに、北海道教育委員会では、教員の力量形成の各過程でより計画的に研修を受けさせることが出来るように、基本研修、専門研修そして課外研修というように位置づけ、研修の実施に努めています。

教育公務員特例法第20-2で定められております初任者研修に始まる教育公務員としての研修は、教員の経験に応じて体系的に実施されていく必要があると考えます。現在、10年目経験者研修の関係で研修制度の見直しを図っているところですが、北海道立教育研究所や特殊教育センター、理科教育センター、附属情報教育センター等の各センターの研修を調整しつつ、経験年数に応じた研修の機会に配慮して体系化を進めているところです。

例えば小学校教諭の基本研修について見ますと、1年目は初任者研修、5年目経験者研修、15年目経験者研修、そして20年目頃から教務主任としての学校運営研修、教頭としての初任教頭研修、校長としての採用校長研修と、教員経験のステージにあわせて研修を実施しています。

### 【複式教育の手引きの作成】

複式教育に限りますと、北海道立教育研究所が北海道教育大学へき地教育研究施設の協力を得て複式指導の手引きを作成し、初任者研修で全員に配布しています。この手引きには、へき地複式教育に関する基本事項が掲載されています。初任者全員に配布した後は、各管内の実態に応じて工夫しながら使用しています。

かねてより、道立教育研究所の教育講座の受講者から、へき地複式教育の学習指導用語が難しいとか、複式指導はどのように行うのかなどの悩みが多く聞かれたため、この手引きの作成に至りました。へき地複式教育に関するこの様な冊子にはへき地複式教育連盟が刊行した本があり、教育研修の大きな力となっていますが、書店に行ってもなかなか手に入らないということで、この手引きが教育研究所の研修講座でも大学の教育実習でも資料として活用されています。また、少々PRになりますが、この手引きについては全国各地の教育研究所や教員研修センターから、さらに海外の日本人学校からも問い合わせがありまして、各方面で活用して頂いています。

手引きには、学校現場を訪問して集めた国語、社会、算数、理科の具体的な実践事例を盛り込み、先生方に活用して頂けるように配慮しました。また、学習指導案の書き方などを示した単なるマニュアルではなく、各学校で先生方に更に工夫改善していただくためのポイントを示し、この手引きをベースに工夫改善して各学校の実態に応じた学習指導を進めてほしいということで作成しました。印刷も2色刷りで大分見やすくなっています。この手引きには、北海道教育大学の村田先生、寺田先生を始めとして我々プロジェクト・メンバーの思いがこもっておりますので、今後の各種研修等で活用して頂けたら幸いです。

### 【へき地複式教育の研修】

初任者研修には、形態別に、自己研修、校外での研修、校内での研修があります。

自己研修については先程お話したように、複式指導の手引きをもとに色々研修していただきたいと考えています。

校外での研修は、教育センターでの研修や各教育団体の研修などがあります。教育センターでの研修では、例えば石狩の教育研修センターで、へき地複式教育研修を行っています。また同様に後志の教育研修センターではへき地複式校研修、網走ではへき地複式教育講座、上川の研修センターでは複式教育講座ということで、へき地教育に関する研修が各地の教育センターで実施されています。

それから各教育団体が開催する研修として複式教育の代表的なものをあげますと、北海道へき地複式教育実践研究発表会が北海道へき地複式教育連盟の主催で毎年開催されています。平成14年度の発表会では、学習指導についての2つの実践発表の他、学校経営、学級経営についての2つの発表もあり、全道各地から約60名の参加がありました。それから公開研究会としては、第51回を迎えます北海道へき地複式教育研究大会留萌大会が開催されました。1日目は基調報告と講演会、2日目は9分科会14校による授業公開、研究協議が行われました。全道各地から850名を超える参加があり、研究協議なども各会場で活発に行われました。この研究会も北海道へき地複式教育連盟の主催ですが、長年に渡る研究の積み重ねの成果として毎年開催されています。

次に校内での研修ですが、へき地小規模校の場合、教員人数が少ないため、先輩と後輩の一問一答のような校内研修になってしまうという課題も聞かれます。この辺についてはこの後、元紋別小学校の長塚校長先生からお話があると思いますが、元紋別小学校では校長先生を中心に職員がまとまって一つの研修に向かっているということです。

### 【北海道立教育研究所のへき地複式教育の研修】

北海道立教育研究所では昭和45年から複式教育に関わる講座を実施しており、現在は「複式学校経営研修講座」と「複式学習指導研修講座」の2つの講座を行っています。複式学校経営研修講座の課題としては、集合学習の進め方や地域に根差した教育活動の充実、校内研修の活性化、指導計画の作成などが挙げられています。校長先生、教頭先生方へのアンケートからは、ミドルリーダーの養成が難しいとか、校内研修の活性化にむけた研修の進め方など色々な課題が指摘されています。

道立教育研究所としましては、へき地複式というのも学校の1つの特徴と考え、グローバルな視点で学校運営にあたることを目指して研修のプログラムを作成しています。

「複式学校経営研修講座」では、これからの小学校教育を考えるということで、複式指導のみならず小学校教育全体に関わる課題について講義を行い、2日目には北海道教育大学釧路校の玉井先生に「北海道における複式小規模校の現状と課題」というテーマで講義を頂きました。その他、教育法規や情報通信ネットワークの活用に関する講義、道内各管内の情報交流、研修協議などを3日間のなかに位置づけています。

また、「複式学習指導研修講座」では、間接指導の工夫、個人差に応じた指導等の課題に対応できるような研修講座の中身にしていこうということで、複式に限らず、今求められる学習指導

とはどのような指導なのかを、今年度は筑波大学助教授の清水先生に講義を頂きました。2日目には、複式学校における学習指導の在り方、子供の心を開く表現活動、そして4日目は他校との共同学習の実践ということで、テレビ会議システム等を用いた共同学習の在り方について講義を行って頂きました。この講座の中では、先生方が指導案をつくり、それに基づいて授業を実践し、その後その授業を振り返って改善していくことを目的としていますので、2日目の午後には、学習指導案の作成、作成した指導案と同単元の授業を所内で見せて頂き、自分達の計画した学習指導と所内で見た学習指導から問題点を出し合い、研究協議をしていく形で進めています。ここでは、学校に戻って自己研修や校内研修の進め方、学び方についても身に付けてほしいということで構成を考えています。

### 【来所相談と自主研修】

道立教育研究所では、自主研修や来所相談も行っております。来所相談は、先生方に研究所に来て頂き資料提供、情報の交流などを行っています。

自主研修は現在のところは研究所の場所を提供するという形で来所して頂き、研究所の中で様々な資料を検索したりしながら研修を進めています。次年度は一つのテーマを決めて、先生方に集まって頂くことも考えています。1人で行うよりも同じ課題を持った先生方が何人か集まって情報交換することで研修を深められるのではないかとということで、自主研修という形ですが一同に会してやることもあります。複式教育関連のテーマでいま考えているのは、複式教育の学習課題や学校課題を打開する一つの手立てとして、情報通信ネットワークを活用できるのではないかとことです。これについて興味ある先生を募ることも考えていますが、未定の状態です。

いずれにしても教育研究所として研修事業の充実に努めているということです。

教員には、自身の人間性を高めるとか、子供と一緒に遊ぶとかという基本的なこともあります。それにプラスして専門性を高めたり、知識や技能を高めたりということも重要です。子供達一人一人が自己実現できたり、子供達一人一人の可能性を伸ばすことができることは、先生方にその様な指導力を修得して頂くための多様な研修が用意されていることに裏打ちされたものではないかと思えます。教員としての専門性の大切さ、研修の大切さを感じながら、北海道教育委員会としてライフステージに応じた研修、自主的に研修をする機会を更に充実していきたいと考えています。

へき地の学校や複式の学校は教員数が少ないということもあり、なかなか学校の外に出て研修しづらいとか、地理的な条件もありますが、何とか年に1回位は校外に出て研修をする機会があれば良いなと思えます。本当に複式教育にしかない良さを活かして、それを先生方が身に付けて行けるような研修をこれから大事にしていかなければならないと考えているところです。

以上、簡単ですが終わります。

### 3. 学校現場から見る教員研修の課題

— 長塚好和（紋別市立元紋別小学校長、北海道へき地・複式教育研究連盟研究推進委員）  
元紋別小学校の長塚でございます。



振り返って見ますと29年間迷い悩み、確固たる何かを掴みきれないまま、今日まで来てしまったと思います。今日のテーマの教員研修だけに限っても、私自身、教員研修を体系的に見ていなかった事に気づかせて頂きました。

私が教員採用されたころは、教師は授業が命、教師は研修が命だとか言っていました。そういう環境に育って、各管内でいま見てみますと、どうも教員研修が盛んな管内とそうでもない管内が出ています。その格差は大幅なのですが、その違いは何かについて、校長になって初めて分かったのです。どうも教員研修がさかんでない地域の校長は、良い先生を採りたい、良い先生を採れば学校経営は理想的になると、良い先生をいかに集めるかに奔走しているような気がします。

ところが良い先生を採ることばかりを考えて学校経営しますと、採った学校は良いですけども採られた学校は教育レベルが下がりますね。水産業で言う捕る漁業から育てる漁業への変換が遅れがちというのは、実は教育の現場にもあるのではないかと最近思うようになりました。

最近言われていることは、小規模校へき地複式の学校で、若い先生達は実践力もあり研究も積み上げていくのですが、大規模校に異動していくと、どうも学級経営が出来なくて、いわゆる昔で言う教育ママとか、悪ガキと言っていいのでしょうか、知恵のついた子供達に潰されてしまう。学級担任をすぐに持たすのは難しくなっているところがあります。

その要因はよく分かりませんが、具体的な策としては、専科として1年くらい慣らし運転をしながら、様子を見て担任を持たさなければならぬという話も校長の間では出ています。この状況には私も驚きまして、そんな傾向も出てきたことを諸々考えていきますと、教員としての勉強方法も教員に求められる資質能力も変わってきたことを実感しました。

大学で修得し教員免許を取って教員になるわけですが、養成から退職までの長いスパンで見た時、どの時期にどんな力を付けていったらよいのかということ、ある程度しっかりと考えないと上手く育って行かないだろうと思います。採ることより育てることがこれからは大事なのだろうと。ひょっとすると、夢と希望を持った初任の先生達は、学校現場で有能な力を充分に発揮させないまま潰されていっているのではないかということにも気がつきました。だとしたら学校現場で先ず何をしなければならないかを考える必要があります。

今日の発表はそういうところに視点をおいています。

### 【教員の職能発達と研修】

先ず、本当は研修と言っても研究と修養と2つに分けられています。これは修養の部分ですよ、研修の部分ですよということでお話しできれば良いのですが、現場では修養とか研究とか分けて考えていない。何でも「研修、研修」と言っていれば収まりがつくと思っている状況です。研修と呼んで研究を指している場合もあるし、修養を指している場合もあるのですが、修養に関しても、人間性とか人格の部分だけやっていたら修養だという雰囲気もあって、会話をするときには噛み合わないことがたくさんあります。

学校現場で困っていることを課題について色々調べていきますと、既に大学等の研究者がちゃんと整理して書いているのですね。学校現場は、そこを勉強しないから堂々巡りで同じ問題に突き当たるのです。そうすると、教員にとって、能力という部分はそんなに重要なことではなくて研修のための環境条件をきちんと整えてやる方が育つことが分かります。

さて、教員の採用から退職までの各段階で、研究や修養をどの様に取り組んでいったらいいのか、研究者の方々はちゃんと考えているようです。けれども、どうしても現場の人間から見ると、研究者が書いていることは、何となくイメージは出来るのですが理解し辛いのです。ある意味で、大学の先生達が現場から嫌われる理由でもあると思います。ですから、研究内容をもっと噛み砕いてくれると現場にも分かるのだけれどなあと思います。研究者同士の学会の中で使用される言葉を、我々学校現場レベルで語っていくために解いていかないと、伝わっていかないような気がします。

教育委員会も生涯にわたって教員研修計画を体系的にやっています。現場の一人一人の先生が10年経ったらここまで、15年ではこの程度というような目安みたいなものを持っていれば、割と取り組み易いのではないかと思います。今現場では、ここまで行ったらこの程度という目安が何も無いのです。教員のなれの果てが校長になると思っていて、職能発達意識もあまり無い。いつかはどこかで講師をやってみたいとか、どこかで発表したいとか、そういうものはあるのです。教員生活のこの時点でこの程度は最低出来るようにしておこう、という目安があると良いのかなと思います。

到達すべき目安が分かれば、それに見合う研修の中身として知識や心構えや方法を身に付けていかないと駄目なのだとすれば、その目標に向かっていくことになるかと思えます。

#### **【教育現場からみた教員養成大学】**

私は北海道教育大学釧路校で育っておりますが、今の学生には、教師とは何かとか、現場でこうしたいああしたいとか、綺麗な言葉ではなくてもっと自分自身の考えを出して行ってほしいと思います。教員の細かい技能や技術はその本人が身に付けたいと思えば必ず身に付きます。教員と言うと子供に何か教えるものだというイメージが私達小学校、中学校、高校の教員からは離れませんが、気がつくといつの間にか子供が自分より育っていたりします。「自分」というものを持たなければ結局教育現場では生きていけないのだと私は思います。極端な話ですが、学校に刺身包丁を持って殴り込みをかけてくる親もいるわけですから、それに向かって物を言えるような人間でなかったら子供を守れませんよね。骨がある学生に4年間で鍛えていくことも大事なような気がします。

もう一つは現場の反省でもあるのですが、毎日の中で生じる様々な問題に対して正面から向きあわないで、横に置いてしまうのですよ。置いてしまうと物事は何も解決できない。ですから今直面する問題をどう解決するのか、問題解決能力を身に付けるようにチャレンジする。学生時代にそういうことを覚えていただくと現場に来たときに更にパワーアップした力が発揮されるのかなと思います。

次に教員仲間から出た話ですが、大学で勉強したことが現場で活きているかという、あまり活きてないということですね。でも私は活きなくて良いと思っています。しかし、学校の実務に関わるような、実践に関わるようなことも、大学の授業内容のどこかに入れて、学生に提供していく必要もあるのではないかと思います。

また、卒業後の心の拠り所は大学にあります。学生によっては自分の指導教官やお世話になった講義の先生達のところに年に1回とかお邪魔することがあるかと思いますが、是非門戸を開い

て置いて頂ければという思いです。

それから教育現場というところは閉鎖的です。排他的です。ですから研究者にとって教育現場に入ることはすごく困難なことだと私は思います。その困難さがどこにあるのかというと、教員側に問題があります。研究者の言うことは理想論であって現場ではそんなふうに行くわけじゃないという考えになるのです。教員は、駄目だとかこうではないとか、建設的に批判されることをとても嫌う傾向にありますので、その辺を学校現場から変えていかなければならないと思いますが、なかなか変えられないと私は思います。大きな期待としては研究者の皆さんに現場に入ってきて頂いて、新しい風を起こしてもらえると嬉しいなと思います。現場では研究者の力を借りたいと思っている人もいます。

### 【教員研修の課題】

学校現場から見て、初任者を5年間のスパンでいかに鍛えていくかをやらなければならない気がします。もちろん基本研修ということで初任者研修制度もあります。各種行政で研修講座も設けていただいています。でも受講する側の意識が重要なのです。初任者研修はありますが、同窓会みたいで夜は酒飲んで昼間の講座では寝ているというような実態です。

初任になったときに切実感があるかということあまり無い。ですから実際に授業をやらせるとか、現場で鍛えなければなりません。一応指導教員もいるのですが、教員採用にならない人が補充されて来たりするので、実際にその人が初任者を指導することはできません。3学級とか4学級の学校ではフル回転状態ですので、初任者のサポートをしてやれるかということ、なかなか難しいのが実状です。

それから、教員自身がどんな教師になろうか、将来の感じだとか教師像を持っていないと、何をどうして良いか分からない。確かに教材研究をして授業を作りますが、教育現場では30人学級でも4人学級でもその教育というのは1対1な訳です。1対1の時に子供が何に悩んでどこで引っかかって、どう困っているかを読みとる力がなければ授業が変わらないのです。何の問題意識もないから、分からないのは子供に力がないとか、分からないのは親が悪いからくらいに見てしまう。自分を顧みることがない面があるような気がします。ですから、修養がとても大事だと私は思います。主体的な修養をどう進めるかは、校長、教頭の責務になってくるわけです。

### 【先行研究の活用】

何でも大抵のことは研究者が研究してまとめてくれています。私達は経験の範囲で仕事をしていくのでそれが総てだと思いがちですが、近年は教育も加速度的に求められる要求が変わってきています。けれども、指導方法そのものはあまり変わっていないのです。ある程度学習理論をしっかり理解していれば、例えば子供の学びに焦点化して研究者がどう考えていて、どの様にしようとしているのかを学べば、5年変わろうが10年変わろうが大きく変わるものではないのです。もっと突き詰めて深く考えていく、迷っていくことをする必要があるように思います。

### 【女性教員の職能発達支援】

近年は女性教員が多くなり、女性が6割、男性が4割、ところによっては男性が3割という学

校もあります。そうすると女性教員の研修あるいは職能発達をいかにサポートしていくかが極めて重要になってきます。と言うのは、結婚、出産、家事や育児のために、教員の職能発達に良い時期をとられてしまう。現場も行政も大学も何とか手を差しのべて、女性教員の力を多いに発揮していただくように、学校教育を新たな発想で構築していかないといけないと思います。

#### 【複式教育研究の課題】

網走管内の小学校だけ見ますと、135校その内へき地指定ではない学校は18校しかありません。複式学級を持つ学校は79校になります。へき地複式教育研究連盟に加入している学校は65校です。それでは其の差はどうなっているのかと言うと、今までは6学級とか7学級あったものが児童数が減ってきて複式を持たなければというのが、数字の差になっていきます。

現在は総合的な学習の時間の研究がどうしても多く、複式教育における教科指導の研究が停滞傾向にあります。また先行研究を踏まえた継続的な研究が少ないのです。数年前にあの学校でやっていた算数の授業と同じものを今年もやっているわけです。何かもったいない気がします。あちらこちらでやっているけれど、それぞれで終わっているのでは意味がないのではないかと思います。

それからこれは限られた地域だと思いますが、授業公開そのものが嫌なんですよ。見せたくない言われたくない。そういうことが現実にあります。校長でさえ教室の中に入っていけない学校もあります。そうすると授業研究も盛んになりません。論外なんですけれど、現場にはそういうところがあるのも事実です。

へき地複式教育研究の組織は、道、管内それからブロック、市町村とよく整備されています。これは相当なパワーです。しかしながら、地区によってはパワーのない地区もありますので、そこは指導主事に指導していただくとか研究者に来ていただいて指導して頂かなければならない。外の風を入れていくという作業が必要だと思います。

以上でお話を終わらせていただきます。

## 4. 研究 討 論

司会 吉田正生(北海道教育大学旭川校)：今日は、午前中の有馬毅一郎先生の講演も含めまして、4人の先生方にお話をして頂きました。これを基に、私どもの考えを深めて行けるような話し合いを持ちたいと思います。これから次のように進めたいと思います。

最初に有馬先生を含めた4人の先生方に対して会場から出された質問等に答える形で、1人8分くらいお話を頂きたいと思います。次に会場から更にお話し頂いたことに対する質問やご意見を頂きます。討論には発表者の先生方にも随時加わっていただく形にしたいと思います。

討論の全体像ですが、先程の長塚先生のお話から大きな図式を拝借させて頂きました。教員の教育実践力をパワーアップさせていく過程を考えた時、大学は新卒の教員養成だけではなくて、職能発達段階で何が出来るか、学校は何が出来るか、行政は何が出来るか、あるいは何をしたいのか、何をしなければいけないのか、更に、その時に障害になっているものは何かというようなことでご意見等を頂ければと思います。

大学

学校

行政

入職

教員の力量形成・職能の向上

退職

大学への注文、逆に大学の方からの注文、例えば研究者が学校に入りづらいというような注文など、旭川校の南部先生も村田先生もそれなりの悩みをお持ちになっていると思いますので、率直なところをお互いに話し合ってもらいたいかと思います。

それでは、4人の先生方に会場からの質問に答えていただく形で始めていきたいと思っています。有馬先生の方からお願いいたします。

**有馬毅一郎（島根大学名誉教授）**：先ず4人の先生方からいただいています。午後のところで3人の先生が発表になったことで、かなり回答していただいた所もありますが、私に宛ててくださった質問は基本的に非常に大事な提案でもありますので、質問を紹介しながら、私のコメントを少しだけしたいと思っています。大変難しい内容で、答弁いたしかねる、私の能力を超えているものもあります。いずれにしても質問いただいた事には感謝したいと思います。

まず北海道教育大学函館校の山口好和先生から、「附属学校内に複式学級を設置して研究を行うのは難しくなっていると思われまます」と。これは新たに設置するという意味かと思いますが、「地方分権が更に進められるなかで、島根県教委が公立校での複式教育実践事例に関する情報を収集する等の交通整理をする動きはあるのでしょうか。研修講座の開催以外でも日常性を重視した情報収集整理でもセクションが必要になると思います（もちろん理想は大学も教育実践センターが機能するのが望ましいでしょうが）」という質問です。

これに関して触れたいのは、戦後間もなく昭和20年代末に複式教育が非常に振興した時期、島根などいくつかの県がへき地教育専任の指導主事を置いたことです。昭和30～40年代にかけて、この指導主事は、100%へき地複式教育の指導主事として勤務しました。その後段々とそのポストが流用されはじめて、今ではへき地複式の専任指導主事を置いている都道府県教委は無いと私は思っています。ただ、別に専門担当を持つ指導主事が、へき地複式地区も担当しているので、仕事量としては昔の6分の1か10分の1程度で、それが実状だと思います。その指導主事が県下のへき地複式教育の情報収集も兼任している事実があるのではないかと思います。

次の質問ですが、「学生と一緒に現地研究を行う上で、小規模校を対象にしたときの留意点をお教えいただければ幸いです。通常の学校計画や授業計画以外にどのようなことに配慮すれば良いか。」ということですが、小さな学校にお邪魔する時にはいろんな事があります。

例えば月曜日にお邪魔すると、必ず3時か4時から職員会議があるので嫌がられます。そうい

う事務的なものもあります。それから学生達と行くわけですから、事前にその学校についての知識をある程度得て行く必要があると思っています。学校を選ぶという点ではその学校に良い先生がいるかということに非常に意識した方が良いでしょう。それからその学校の特色が、一般的な特色なのか突出した特色なのかは学生には区別が付かないわけです。そこで、学生は複数の学校を訪問することが原則だと私は思っています、1校だけ連れて行けば良いというような類ではないと思っています。学校実地訪問は複数校以上を経験させるべきだし、その中から学校の特質、特徴、努力点などが見えてくると言えると思います。

例えば、私が訪問した学校の中に4人しか子供がいないけれど、15年以上にわたってカジカガエルの研究をしている学校があります。私はこの学校が好きでしょっちゅう行くのですが、学校のすぐ傍に川があってカジカガエルがいっぱいいるから、朝来た子供達はカジカガエルの観察をして学校に入り、帰りも川に行って見て帰る。冬はいませんけれど、1年中お付き合いをしています。ですからカジカガエルの顔まで覚えているような状態で、あいつは元気が良いとかあいつは最近食欲がないとか子供は言っています。カジカガエルの研究は、去年と同じテーマでは面白くありません。ですからここに転勤して来た先生にとって、カジカガエルのどんなテーマで今年は頑張るかが勝負となります。子供達の単純で純粋な疑問や興味を勘案しながら、先生も真剣に一緒になって良い研究をしているのです。ですからその学校に行きますと、カジカガエルの研究に対する表彰状も山ほどあります。過去に表彰を多く受けているから、後から転勤してきた先生はいい加減に出来ないのです。京都大学大学院でカエルの研究をしている先生なども注目して時々来られているほどです。

すごく良い研究なのですが、テーマ自体は子供っぽくて、ピョンちゃんはどれくらい飛べるかとか、そこにいるカエルの中で一番ジャンプ力があるのはどのカエルか実際に跳ばせた実験とか、カエルにとっては迷惑なことですがカジカガエルはどんな環境が好きかとか、カジカちゃんのお家はどこにあるのかとかです。それからカジカの色の変化というテーマも面白かったです。私達素人には分かりませんが、黄色、橙、白、水色、緑、茶色、赤、黒へと、1分間の間に桃色からそういう色に変わる、カエルを連れてきて一定の条件の所に入れてどんな色に変わるかをしばらく観察する。調査が非常に科学的なのです。子供らしいのですが非常に科学性がある。先生は理科の先生であろうが音楽の先生だろうがみんなそれをやらなければならないのです。

学生は、訪問先の学校のこのような教育活動を参観して、先生方の教育の工夫や努力とか、先生と子供の関係などの教育の原点を学びます。学校実地訪問では、教科教育的なもの総合学習的なものを多々含めながら、このようなことを意識して訪問先を選んでいくことが重要なと思います。

山口先生の質問の3つ目は、「島根県の複式の資料はどの様に活用されていますか。評価に関わる調査などはどうですか。」です。これは県教委や研究所やセンターでいろんな資料を作ったりします。それを配布しますが、どれだけ効果を上げたかチェックが必要ですね。県教委で色々やっているようですが、本格的にやった例はどれだけあるのか分かりません。けれども、現場には先程お話があったように複式教育関係の参考図書は非常に少ないですから、県教委やセンターから出したものが非常に頼りになると思います。ただ、評価が難しいのは、島根県の場合では、例えば生活科指導の手引きというのを出したときに、その片すみに複式学級における生活科指導

に関するページが2, 3ページある場合です。全体が複式用の資料だというものはありません。その様な状況では、複式指導に関するページがどれだけ効果的だったかは計りにくい面を持っている。

釧路校の先生からは「初任地が地方の場合のメリット、デメリットに関して」の質問を頂いています。これについては、私も話の途中で申し上げましたが、昭和30年代までは島根県の場合は小規模校へ初任者を派遣していたのです。ところが30年代の末に分校に派遣された女性の先生が自殺して亡くなるという大事件が起きました。これは小さい規模の学校に若い先生を派遣した事に伴う極端な例ですけど、大変な問題であり負担も大きすぎるし、環境的にも様々なことが反省されました。その後、島根では、初任地は指導者のいるような所に派遣するという原則でやっていますね。これはご承知のようにいろんなメリット、デメリットはあるわけですし、諸事情もあるかと思いますが、そのようなことも経ながら島根県はスタートしております。私はその方が良いかという気もするのです。

質問の2つ目、「もし一般校を実験校にする場合の附属学校の良さと課題について」ですが、一般の学校を実験校にする場合については、広島大学附属東雲なども県北の学校を附属学校の代理に使ったりしています。こういう学校は現地の協力心が非常に強いので、附属学校側、大学側にとっても非常にメリットもあると思いますし、市街地の中で複式研究をしている学生にとっても、本当のへき地に来てへき地の学校を使って実習することは、附属学校の複式学級では出来ない実習校としての役割を果していると思います。

3番目の質問、「大学院での複式教育の再生産をどの様にすれば良いのか。」です。私がいろいろと訪問する時には、センターの若い先生、つまり複式教育の担当講座を継ぐ若い先生と一緒にいらっしゃいますが、いろいろ難しいですね。大学のへき地教育の研究も絶やさずに継続していかなければと思っております。

札幌校の杵淵信先生からは、「最近都会の学校も小規模化してきているが、その実態がどの様になっているか知りたい。関連して市街地の小規模校で教育に何か特別のものがあるか教えて下さい。」という質問です。まず、都会地のドーナツ化現象があって確かに小規模化は大都市のなかにも起こっておりますが、数年前に私が文部科学省でお手伝いしたときに、大都市の中央でも複式校化が起こっていると書いたら、それはありませんと文部科学省の役人に叱られました。複式校にはなっていないが小規模校化は起こっている。これは少し微妙ですが、気を付けなければとその後思っています。都市部の小規模校の教育を考えていく時、勤務している先生自身に地域感がないことが一番問題だと思っています。つまり市街地の中では、地域に関連した、あるいは地域を意識した教育が非常に弱いのです。田舎の学校に行けば行くほど、地域と関連を持った活動も多いし、先生も自然と地域との関連を考えざるを得ない状況にあります。都市部はそういう点で弱い。つまり地域ぐるみの教育も出来ないし、その辺をどうするかということで、私も疑問に思っているくらいです。問題はまた他にもいろいろあるでしょうが。

最後に、函館校の徳永先生からは私が配った別刷りの中に、「大学研究者の研究は、大学院の基礎的研究でもう少し実践に活かすことの出来るような具体的な内容、提案を持った理論をやって欲しいというような事を書いてありますが、そういう典型的な事例があったら教えて下さい。」と。これは大学の研究者として大事なことだと思いますが私には良い例がありません。へき地教

育が研究者に要望していることは3人の方が午後にお話しされたことで足りると思います。

私は現在放送大学を担当していますが、一言で言うと大学は国立大学法人化へと今進んでいますが、私達一人一人の教官は独立個人教師化にしていかなければならないと思っています。つまり一人一人の教師という体が一つの会社のようなになる。私はこういう能力を持っています、だからこれだけ給料を貰っても良いですというような事さえも考えるように、国立大学法人ではないが独立個人教師あるいは会社。こういう感覚が徐々に出てくる。これは大学人もそうだし一般の義務教育学校でもそういう傾向が出てくる。そこで放送大学を通して見ますと、学校の先生方が自己研修、自主的研修として上位の教員免許状を取得しようということを個人の都合でやって来る。これは県教委の指令でも何でも無いわけですよ。実は、明治時代も大正時代もそうだった。あの頃の先生方は自分で検定を受けて免許を取得し、自分の給料を上げるために資格を取ったのです。戦後今まではそういうことがなかったですね。一旦大学を卒業して2種免許状を取ったらもう良い。一生それでやれると思ってやって来たのですが、これからは、途中でそれぞれが自分の特色を活かして、努力をしていかなければという形が、研究者ばかりではなく学校の先生にも出てくると思います。

そこで、そういう人々に対して、各大学が夏季バイキング講座というような様々な分野の講座を提供する。教科的分野も色々あるかも知れませんが、教師として多くのテーマがあると思いますね。このような、特色のある夏季バイキング講座を北海道教育大学が出せば、全国からあるいは道内から先生方が集まってきて、自分の研修の必要に応じて選択して摘み食的に受講するようになる。そんな方向性が出てくるのではないかと私は思っているし、出るべきではないかと思っています。教員誰もが積み重ねて終わりまでやっていかなければならない研修の部分と、このような、個別のテーマや能力に応じて、メニュー的に選んでいく研修体制と、大きく2種類を将来の研修システムとして作り上げていかなければならない。全員同じように積み上げて行く制度については、教育委員会の一般的基礎的研修として、10年目20年目研修システムという形で今は作られています、その辺の改革が必要ではないかと思っています。

**吉田：**どうもありがとうございました。私は以前小学校教員をやっていたものですからお節介で、今のお話を図式に結びつけなければという義務感に駆られて結びつけます。大学は何をしなればいけないかという所では、有馬先生から先生方の自己研修の手伝いをしなさいと、夏季バイキング講座みたいなものも考えられるではないかというような事だったと思います。もう一つ前の方でお話されたのですが、これは村田先生にとっては大変辛いことだと思いますが、誰か一人がずっと続けてやれと。村田先生を名指したわけでは無いですが、継続して学生を育てていくような人間が大学にも必要であり、誰かがその任務を負わなければならないということ。学校の方は先生達が地域を知らないとなれば教育は出来ないのだから、先生方が地域を知ることが出来るようにサポートをするべきではないか。地域ぐるみの教育というのが必要なのではないか仰っていたと思います。行政は、気の弱い力のない先生に辛い思いをさせるなど、いきなり自殺するような所に行かせてはいけないということのお話だったと思います。

次に川口先生お願いします。

**川口正一（沖縄県立総合教育センター）：**長期研修について質問がありました。効果があるのではないかということで、もう少し詳しく話したいと思います。



沖縄県立総合教育センターでは教科研修科、経営研修科、理科研修、情報、IT、他7つの科が半年、1年研修を実施しています。前期半年くらいで約60名、後期半年約60名、1年研修も20名以上の研修生を取っています。

取り方ですが、申請は自主的な希望で出します。高校教員は直接教育センターに申し込んで、定員や出された研究テーマなど諸々のことを見ながら判断して受け入れております。小中学校教員の場合はその先生が所属する市町村教育委員会の判断です。先生が希望して先ず学校長に出します、学校長が推薦書を書いて委員会に出します、教育委員会はその学校の管轄の事務所にします。事務所の方では人員付けをします。それがセンターに来て、本人が書いた研修希望の内容などを出来るだけ勘案していきます。

へき地教育研究室の場合は去年までは恵まれていまして、平成12年度は1年研修3名と半年研修2名を取っていました。主事も、へき地教育担当主事と言うことでへき地複式を担当する主事が2名いました。昨年13年度も1年研修2名に半年研修2名ということで取っていました。今年度から1名になりまして半年研修3名だけを取っています。各学校にいろいろな支援が出来るようにするべきだということから、次年度は1年研修1名、半年研修1名ということに決まっています。

学校から研修に出てきていますから補充教員が付きます。研修期間中、相当数の補充の先生のための予算が付けられています。センターは沖縄本島の間地点の沖縄市にありますので、那覇市や本島南部から研修に来る先生は直接車で通っています。名護市より北部の、本部村とか国頭村などは1時間半以上かかりますので、そのような先生方に対してはセンターの宿舎があり、無料で提供しています。宿舎に入りますと手当が付きます。先生に対して出張という形で手当も付きます。そういう予算面ではかなりバックアップしています。他には、希望があればですが、親戚が近くにいるという人はそこから通っても良いとか、アパートを借りても良いとか。アパートを借りる際の補助も多分あったと思います。宮古、八重山地区という離島から来る方は、当然宿舎に入るか、親戚の家から通うのですが、家庭を持って子供が小さいために、研修センターで研修したいのだが半年間も離れるのは厳しいという先生のためには、宮古教育事務所の一つの部屋を貸していただいて、そこで小学校1名中学校1名の教員を半年間、センターの主事が何回か行って研修する制度もあります。メールや電話等で進めていくのですが、基本的には自宅から事務所に通ってということ。その研修の先生は入所式とか中間検討発表とか成果報告会と修了式とか、そういう時には教育センターに出てきて研修するようになっています。

また、基本的には月曜日から金曜日までが研修ですので土日は自由です。遠方からの先生方で、何か用事があって帰らなければいけない場合は年休をとることも可能です。ただ、受講しないといけない必須講座がありまして、それがあるときには遠慮してくださいという形で進めています。

それから県の教育センターは一つしか無いのですが、他に市町村の研究所があります。名護市教育研究所、沖縄市、浦添市、那覇市、島尻、石垣にも教育研究所があります。そこも半年研修を受け入れています。研修の受入人数は少ないのですが、県の施設の方が大きいのでコンピュータや資料も充実しており、本当は県の方に申し込みたいという先生方が大半だと思いますが、これら市町村の研究所を利用して長期研修をしている先生方もかなりいます。ですから、教頭を受ける位の年齢になりますと、ほとんどの教員が長期研修を修了したことになると思います。

私の年齢くらいの人でもほとんどが、県か市町村の研究所の研修を修了しています。以上です。

**吉田**：研修しなくてはいけないというわけですが、行政として分担しつつ研修システムを充実させているというお話だったと思います。充実と言うときには、経済的な負担や心理的な負担もあり、それをどうしてやるか、教員の補充システムの充実を図る所からもお話を頂きました。

続きまして永澤先生お願い致します。

**永澤篤（北海道立教育研究所）**：函館校の内藤先生から質問を頂きました。「複式の授業方法という枠の中に各教科の授業方法という枠がある。このところで複式の前に、あるいは平行して、教科指導の技能向上をどう図るか、その課題がこの手引き書の中にもあるのではないか」という質問でした。私も全くその様に感じております。教科指導と複式の学習という大きな分け方も出来ませんが、それ以前に、例えば基本的な授業方法ですとか、指導態勢に関わることですとか、そんなこともあると思います。

子供の反応を予測して対応し、評価して、また次の指導の手立てを考えるという一連のサイクル、指導と評価の一体化レベルで言う指導に関する部分の研修、それから教科特有の部分での研修というのにも必要になると思います。そして更に、複式の場合には「わたり」などの学年別の研修、それから同内容指導でも学年によってねらいを変えるのであれば、同じ授業をしながら3年生にはここまでのことを要求し、4年生にはここまで要求するというような複式特有の研修も必要になってくると思います。

この手引き書の中ではそれを明確には表していませんが、両面に触れながら書いたつもりです。極端に言えば、この手引き書を作る際に、問題解決的体験的な学習が充実して教師の指導がそこで充実すれば、あたかも両学年が単式の学級のように自由に学習を展開することが出来るのではないかという発想がありました。ですがそうなるためには、研修と言いますか研究と言いますか修練と言いますか、教師としてのその様なことが必要になってくる。この手引き書の中では、初期のステップから始めていって、やがてはそういう充実した学習を展開できるような力量を高めてもらいたいという願いで作りました。

ですから例えば研修についても、複式だから複式の研究会に行くということではなく、複式であっても単式の教科の研究会に参加したり、複式の研究サークルで研修したり、その教科のサークルで研修したりというような、両方平行して進めていくことが望ましいと思います。行政としてはそんな研修機会を充実整備することに努めているということです。

**吉田**：複式教育の特殊性ということも当然あるわけですが、教科書通りでなくても、例えば、ある教科のここはどのようにしていくのだろうか、その点の内藤先生から出された質問になってくると思います。

それでは長塚先生お願いいたします。

**長塚好和（紋別市立元紋別小学校長）**：内藤先生ありがとうございました。2点についてお答えしたいと思います。まず始めに「研修に関わって職能発達あるいは研修力、教員の力量形成の面で、先輩や校長に守られているという感覚が薄いのではないか。それは教員が鈍感なのかあるいは先輩や校長が薄情なのか。」という質問だと受け止めました。更に「安直な猿まね実践でも真似る対象が優れていれば有効ではないか。」という質問もありました。

私の表現が適切でなかったために誤解を受けている点もあり、補足したいと思いますのでよろ

しく願います。まず、自己研修の際には、修養に係わる部分でも研究に係わる部分でも、教師自身が子供を対象とした問題意識をどの程度持っているのかどうか、それに関する自分の記憶がどの程度あるのかというところから、それぞれの研修課題が生まれてくるのだらうと思います。そこがポイントになってくるような気がします。

職能発達と言うと制度的な面が多く言われるのですが、教育現場では、子供から学ぶこともあるのです。子供から学べるようになった教員は、相当力が付いているのだと思います。自分が指導したことに子供がどう反応したか、あるいは教員としてのエネルギーを子供がくれているということも実際にはあるのです。

そのあたりの、アンテナのような感覚的なものですが、それを感じ取れるかどうか。教師が指導している積もりが実は、子供が先生を支えているというようなことは実際にあるのです。

それが感じ取れると、子供と教師との本当の関係というのが確立してくるのではないかなと私は思うのです。

さて、先輩教員や校長が薄情かどうかということですが、恐らく薄情なのだと思います。一方では、校長だから、教頭だから言うことを聞かなければいけないというのではなく、教員は、目の前にいる子供の教育を最前線でやるわけですから、このようにしたいときちんと主張すべきだと思います。校長や教頭の言うことをよく聞く素直さは良いのですが、素直だけではないだらう、そこには問題意識や課題意識が必要であらう、それが研修あるいは職能発達のエネルギーになっていくのだと思います。

それから、校長は薄情なのかということ、現象的に確かに薄情な方もおられるわけです。北海道教育委員会は駄目な校長は採用していませんので皆さん立派な校長なのですが、校長研修会や研究会などの報告を聞いていますと、例えば特色ある教育活動について、あなたの学校ではどのようなことをやっていますかと問われると、こんなことをやっていますと言うのです。こういう時の校長の発表は本来、どういう理念でどのような学校作りをして、どのような手立てを立てて教育活動や特色ある学校をつくっているのか、そのために教頭や教務主任や研修主任をどのように動かし、どのように組織していくか、環境条件をどう整えたか、ということだと思のです。ところが、教務主任と研修主任がこんなことをやりましたと言うだけの発表が案外多いのです。それからよし悪しは別にして、「一輪車で縄跳びをする、うちの特色ある教育活動は、一輪車で縄跳びをすることです。」と言うのです。どこの学校でも大体そのようなことをやっているのですよ。それが特色になるかどうかは、普通なら誰でも気づくことではないですか。それを真面目な顔をして言うのですよ。私自身も含めて校長の力量を反省していかないといけないのです。校長がこうだから教員も育たないということもあるのだと思います。学校の特色とは何かを校長がきちんとおさえる、突き詰めることをしないと本物になっていかないのではないのでしょうか。

もう一つの質問にお答えしますと、私は真似が駄目だとは言っていません。例えば教員レベルでは附属学校の授業を持ってきてそれをやってみる。それは良いことですし先進校での実践を持ってきてやるのも結構だと思います。それを私は否定していません。私が言いたいのは、その1時間の授業がしっかりとした内容になっているかどうかなのです。つまり、4月からの学級経営で子供の学びをどのように作っていくかという過程を抜いて、他校の実践を真似てこの授業をやったけれどもこの通りにならなかったと言うのは、大学で4年間学んだ人の考えとしては幼す

ぎるような気がします。現場はそういうことを感じられないのですよ。もっと大切な条件があるのではないか。他の実践の真似をすることは否定しませんが、そのような大切な条件の追求をしないままでは研究成果は出ないだろうと思います。もう少し自分の足元を見て、子供を見て、地域環境を見て、素晴らしい実践を自分や子供のスタイルに組み替えていく作業をして授業案を作っていく。人が持っていて自分に足りないものをそっくりやろうとするのが無茶苦茶な気がします。

その意味で、真似することが駄目ではないのですが、真似していかに消化するかという作業が足りないということをお話したかったのです。

研修とは何かと突き詰めていくとなかなか難しい話です。研究というのは個人研究でも校内研究でもそうですけど、原理原則を追いかけていくものだと思います。そうすると基礎研究、応用研究と言う時、現場では基礎研究の部分が弱いのです。無理に結論を出そうとして無茶苦茶なことをやっているよりも、研修課題の要因は何かを現場から見つけ出していく。それを説明してくれるのは研究者だと、役割分担の考え方をしていく方が良いのではないかという気がします。

**吉田：**ありがとうございます。校長としては、当然、教育の目標を持たなければいけないし、そのための具体的な内容とかも持っていかなければいけない。そうでなければ先生達の指導も出来ないのではないかというお話だったと思います。

今4人の先生方にお話していただきましたが、他にご質問があるということですので進藤先生お願い致します。

**進藤貴美子（北海道教育大学岩見沢校）：**島根も沖縄も初任者はへき地に派遣しない方式を採っていて、先程の有馬先生のお話でもその方が良いというお話でした。北海道はその問題について初任者をどこへ派遣するかについて議論があるのかなのか、あるいはその事についての考えはどうか行政の立場の考えを聞きたいと思います。

**吉田：**教え子を卒業させた時、教え子があまり人気の無いところに行くとかやはり心配なのです。うまくやって行けるのかなという質問だったと思います。決して行政をやっつけるとかそういうことではなくて。

**進藤：**やって行けるのかなというよりも、全体のライフステージに応じた研修を構想するのであれば、どのように職能とか教師の力量を高めていくのか。ゴールは無いのかも知れないけれど、目標に向かって養成していくことを考えると、どういう人事配置をしていけば良いのか。10年目研修が出ているのだけれど、そこについてどう考えるかということですよ。沖縄県に去年お訪ねした時に、初任の3年間はとにかく本島でという、そこで初任者研修を積んでから離島にというお話を聞いた時、すごく全体を考えて構想しているなという印象を受けたのです。3年間という期限で都市部に戻って来られる。でも、へき地での教育を続けたい人がへき地小規模校に残るという選択肢も保障されている。へき地の教育に熱意を持って進んでいきたいという人達も保障されている在り方に、大変共感したのです。けれども、北海道では、私の研究室の卒業生なども3年我慢すれば都市に戻れるとか、そういうような意識で初任地に向かう傾向があって、決して良いことではないと思うのです。

私の研究室は総合教育ですが、へき地・小規模校教育実習に行くと感動して帰ってくる学生もいます。先ほどの有馬先生のお話の中でも、子供達の合唱を聴いてそれだけで感動して涙を流す

ような、へき地小規模校での体験こそが教育現場が持つ迫力であるというようなこととお話されていました。そのような体験が、果たしてへき地校で勤務するという事に繋がっていくのか。それともそこには断絶がどうしてもあるのか。そういうことをトータルに考える必要があるのではないかと感じているものですから、このような質問をしています。

吉田：永澤先生、お答えしにくいですか。

村田文江（北海道教育大学へき地教育研究施設）：最初の質問は、北海道の教育行政に限ったことではなく、このようなことが議論される場があるのか無いのかということですよ。私自身も含めたことですので、永澤先生にだけの質問ではないと思います。

玉井康之（北海道教育大学釧路校）：質問への答えではないですが、事例として。例えば、初任地としてはどこが良いのか、いろいろな事例があって私も混乱しています。例えば、若い人がへき地に行っていっぱい仕事をやらされる。それが当たり前になってくると、今度は都会に行ってもそうしたことをやろうとする場合もある。一方で最初の赴任校が都市部の大規模校で仕事が分掌化されていて、それに馴れてしまうと今度はへき地校に行っても対応出来ない。

また、ある学校で聞いた話ですが、「この学校は遅れている地域にある。だから子供の学力が落ちるんだ」などと言った人もいたらしいのです。都市部の学校ばかりを回っていて、へき地校の経験がない先生に対して、へき地教育の研修をやらなければ行けない。それは、行政だけではなくて大学もやらなければいけない。初任校がへき地校になった若い先生に対しても、そこで支える研修をやらなければいけないと思います。これは、初任地としてへき地か都市部かということではなく、教員のライフステージの中で、それぞれのパターンの研修方式をトータルで考えなければならぬと思います。

永澤：まずこうあるべきと私がお答えするような内容ではないと思います。これは皆さんで議論すべき内容だとは思いますが。ただ、玉井先生のお話を聞いて私も思ったことは、私自身を振り返ってみても、へき地複式校に行つて非常に多くのことを学んだということです。初任地があそこだったから私はその後教師を続けてこられたと思うぐらいです。つまり、私は函館の市街地と言えは市街地、田舎と言えは田舎なのかも知れませんが、函館の街の中の大きな学校でしか生活をしたことがない暮らしをしてきて、児童数3名の学校に行った時に、やはりそこで初めて見たことがありました。学校全体が見えたこと、地域と学校の関わりが見えたことなどです。子供自身から学んだことも多くあって、あの時の3年間4年間が自分の教師としての力量を身に付ける上で非常に価値ある体験であったと言えます。どこに行くのが良いということではなくて、やはり、先ほどお話にもありましたように、10年間を見据えて、へき地複式教育をどこに位置づけるか、体系的にどこに位置づけるかということは、もう個人のレベルになるのかという気がします。

つまり、何年目にへき地複式教育を受けるということではなくて、その一人一人の教員のライフステージに応じて、そういう研修を位置づけていくことになるのではないかなと思います。そのような研修の在り方を、北海道教育委員会としては考えています。ですから、今言ったように初任地はどこにするのが良いかという事については、新たな議論が必要になってくると思います。

吉田：進藤先生いかがですか。

進藤：先ほど、鳥根県では自殺した初任の先生がでたことを契機に、方針が転換されたというお話でしたが、沖縄県の場合はなぜ沖縄本島でと考えられているのか、少しお聞きしたいです。

川口：実は、僕等より上の世代の先生方は、新卒の時の任地は離島へき地でした。離島へき地校は新卒か管理職を目指す極端に若い先生になっていて、アンバランスだったそうです。ところが初任者研修の施行が始まって、昭和60年か61年頃だったと思いますが、その辺からへき地地域から「いつも離島へき地校は、教員養成研修の学校なのか」という声があがったのです。いつも若い人が来て、馴れた頃に本島に帰る。次も若い人が来て馴れた頃に本島に帰るという状況でした。それが県の方の耳に入ったかどうか分かりませんが、教員資質を高めることが子供達への還元になり、教員になった1年目がとても大事だということで、全力で初任者研修をバックアップして行くことになりました。沖縄本島に6地区ありますが、まずは大きな学校で授業のノウハウなどを、1年間指導主事も付いて研修してもらい、授業が成立するようになってから、へき地校へ赴任するようになっています。

これは理想的で良いかなと思いますが、北海道ではこのような方式を取っていないけれども、学生時代に複式校での実習があることを聞き、今日来て良かったなと思います。というのは、私自身、単式で何年間かやって、4年目に複式の教員になったのですけれど、やはり複式の授業はイメージしていたのと全く違って非常に難しいことだったのですね。それまで単式の授業をやって来て児童数も40名を越えていたのに、わずか4、5名、6、7名の学級が2つに分かれた状態で、1時間の授業で自分のやろうとした内容が消化できなかったのです。難しさを痛切に感じたわけです。例え慣れた先生でも最初は大変なのだということが実感として分かったのですね。でも、大学時代に複式の実習で実際に授業もやってみると、複式の大変さはこうだと実感として持つことができる。それは先ず心構えができるわけです。教員を目指す先生方、特に若い先生方は、使命感を持っていると思いますので、複式校に行くときには難しさの中でも頑張るって行かなければいけないという気持ちがあれば、子供達への関わり方も良いものが出ると思うんですよ。

実は沖縄県の場合ですと、教員研修や産休のために補助教員を結構抱えているわけです。私が訪問したある複式設置校では、補充の先生が研究授業をしたのです。一つは1、2年の算数の教科指導、あとは2年生の生活指導でした。この補充の先生の授業が見事だったのです。これはどういうことかと考えました。この先生の頑張りもあったと思いますし、以前も大きな学校で補助教員を何回かやっているわけです。そういう面で鍛えられていて複式校に来て、今までのノウハウを活かしながらか見事な授業をしているのです。

このように考えると、複式を担当する前の段階で複式の研修を設定したり、大学での研修などを上手くサポートしてあげれば、例え若くて経験のない先生でも、使命感を持ってかなり行けるのではないかと思います。ある面ではいろいろと苦しいところもあると思うのですが、このようなサポートをしていくと良い先生ができると私は思います。

吉田：足寄の高橋先生、いらっしゃいますでしょうか。今までのお話しを聞いていていかがでしょうか。

高橋政人（足寄町立足寄小学校）：私は教員6年目ですが、その内の4年間で40人学級を持っていて、何でお前がここにいるのだと思われる方もいると思いますが、憧れのへき地教育を目指してここにやってきました。私は教員養成大学には行っていませんし、複式教育の実際というのも全然分からない所があります。研究会に参加してその授業を見たりするのですが、多くが総合学習やふるさと学習みたいなもので、「わたり」や「ずらし」などを本では見るのですが、やはり

実際に見る機会がなかなか少ないのです。道立教育研究所の講座もありますが、複式指導を経験している人でないと行けないんですね。私はいま小規模校ではないので参加できない。今は、自分で計画して見たり、実際にやってみたりしています。小規模校に行ったときに直ぐ役立つようにしていこうと思っているところです。

**吉田：**北海道教育委員会の佐野先生いらっしゃるのでしょうか。佐野先生は今までのお話しをどの様にお聞きになられたのでしょうか。

**佐野博之（北海道教育庁）：**最初に出た人事的なお話に関してですが、沖縄県などの各県のへき地複式校の状況と、北海道のへき地複式校の状況には、学校数、職員数、いわゆるへき地と複式の兼ね合いなどに違いがあります。北海道の場合、小学校、中学校の60%弱が、いわゆるへき地指定で総学級数もかなりあります。ですから人事異動も先生方の動きの中でへき地校を抜きにして教員が動くというのは作業上難しいのです。沖縄県のような人事異動のシステムは、小中学校の場合、14教育局管内で努力はしているのですが、いろいろと生活条件の問題とか先生方の実際上の問題もあって、なかなかうまく行かないのが現状です。ただ、最近の若い先生方の傾向として、自分からへき地校というか複式校に行きたいと言う先生が増えていることは事実です。かつて20年位前は全くいなかったです。

北海道と言うと都市部に自然があつてと考えがちですが、ところが実際には人がいない地域も多くあるわけですから、その落差で落胆してしまう。このように条件的には、かなり違うかなと思います。

私も、最初は3級へき地校で、その後8年ほどいました。教育現場に21年いたうち11年間はへき地で7年位が普通の都市部の学校でした。どちらが良いか悪いかということは先ほども話が出ましたが、良い悪いというレベルの話ではないと思います。どこにいても子供がいたわけですから、そこに自分が今まで育ってきた環境と照らし合わせた時、大きなインパクトを与えられる部分もあるわけです。生活の部分、あるいは子供達、保護者の方、そのような時にその先生が教師として何ができたのかを、その都度自分なりに考えることができる素養があればいいなと思います。

**吉田：**メープル小学校の赤間先生いかがでしょうか。

**赤間由美（岩見沢市立メープル小学校）：**何をお話したらいいのか分かりませんが、先ほどの進藤先生の質問との関連から言いますと、私も34年間教員生活をやっていてその内の19年間はへき地複式に関わっています。一番自分に力を付けたのはいつかと考えてみれば、大規模校にいたときよりも圧倒的にへき地複式校にいた時でした。研究をみんなで切磋琢磨をした時、完全に複式で「わたり」「ずらし」を行って、子供達がいくら少なくとも行ったり来たりしながら、自分の技術というか指導力というか後ろの目で見ながら力を付けた時が、一番自分の力量を増した時だったと振り返ることができます。

これは、初任者がやるべきなのか、何年か経験した者がやるべきなのかは、その人によって違うのかなと思います。杓子定規に何年から何年まではこうした方が良いというようなことは言えないのではないかと思います。私は中学校のへき地複式校から小学校のへき地複式校に来て1、2年生を持ったら、こちらの言葉が通じない。1、2年生の複式はとても難しいのですが、複式校でずっとやっていると、上の学年の子供が下の学年の子供達に力を伝えていくという複式校な

らではの伝統が積み上げられて、子供達に教えてもらえました。11年そこにおいて大規模校に移るときにとっても不安でしたね。40人の学級を持つとなったときとても不安だったのですが、行ってみたら何の不安もなかった。私はこれだけの子供達をみる力があつたのだなと、いつの間にか力を付けさせてもらったという経験をしました。ところが2, 3年経つとそれも消耗してきてしまい、自分の力が段々すり減ってしまう。大きな人数の学校での指導方法が知らず知らずに身に付いているのかも知れませんが、それは、違う場所の学校に行った時に初めて分かるようなものなのかも知れません。

実際に授業を持ってみることを何時間かやることによって、物凄く自分の力になるということから考えると、学生も現場教員もそのような力を付ける経験が膨らんで行くようになればよいと思います。島根県の事例にあったように、経験者が改めて大学で勉強をするようなことも含めて、杓子定規でなくその人のライフステージに合った経験を積み上げていくことを、大学も含めて支援していくことが大事ではないかと感じます。

吉田：いま進藤先生から出された話題について話を進めておりますが、他の先生方で今のお話に関連して何かありましたらお願いします。

門脇正俊（北海道教育大学岩見沢校）：結論的には、何人かの先生方が言われたように、それぞれの持ち味があると思います。教育大学岩見沢校では3年生の時に都市部の学校で実習がありますが、その前後の2年と4年の希望者が小規模校の複式で実習できるということで、小規模校経験によって学校全体が見えたり個に応じた指導を体験したり子供が好きになったりする。3年生の教育実習も全体が見易くなるというメリットがあると思うのです。大規模な学校では教科指導を徹底して訓練するというメリットはあるかと思いますが、3年の実習を終わって、やはり自分はへき地でやりたいと、4年時の複式実習をしてへき地校への希望を持つ者もいますし、そうでない学生もいます。

小規模校向きの学生もいるし大規模校向きの学生もいる。両方を経験することで両方活かされていくということかと思うのです。その点では、沖縄県や島根県では、初任者はへき地校では駄目だと、都市部の学校に行って多人数の授業を経験し教科指導をやって初めて複式校に行くという捉え方ですね。でも、自分はへき地でやりたいという新卒者も最近は多くなった。今の学生に対しても初任者だというだけで配置するのが良いのかどうか疑問が残るのですが。

道教委ではへき地複式校が多いということから、割り切った対応がしづらいということもあるようですが、初任者研修では小規模校の教師も大規模校の教師も似たような形で同じ内容で研修を受けているのか。小規模校に勤務している教師と都市部の学校に勤務している教師と重なる部分はあるとは思いますが、勤務校の状況に配慮した形で研修がされているのか、それをお聞きしたい。沖縄や島根についても、へき地で頑張りたいという教師がいた場合、本人の希望をどこまで適えられるのか。それから道教委の見解もお聞きしたい。

川口：教育センターでは高校の初任研が毎週木曜日に行われています。高校の場合、宮古地区、八重山地区は去年までは宮古高校、八重山高校という大きな学校で初任者配置をしていました。今年度からはそこにも配置しないで、沖縄本島内の高校に初任者を配置することになりました。小中で言いますと自分が行きたいという希望は基本的に通りません。離島へき地でやりたいというようなことは言えない。採用者側で最初からどこに初任者を置くかを決めていると思います。



また、指導教員の配置という人事もありまして、初任者をどこにということは決められていて、小さな学校や複式校への配置は最初の段階からはずされている状況です。補充教員や採用待ちの段階で、小さい学校での勤務を希望することはあり得ます。けれども基本的には、先ず教科指導のこと、それから先輩から学べという方針があらわれているのだらうと思います。

**有馬：**教員の基本的な人事異動のルールというものを各都道府県教委は作っているわけですよ。そういう大きな人事の扱いの中の一環として、新採用教員の配置が考えられているのだらうと今お話を聞きながら思いました。

県によって異動ルールが違います。鳥根県の隣の鳥取県には中部、西部、東部と3つの教育事務所があって、へき地校はほとんど無いのです。西部の一部にへき地校がわずかにありますが、鳥取県では東部出身の先生は東部で一生過ごしてしまうのですよ。中部の先生は中部で一生過ごしてしまう。例外は勿論ありますが基本的にはそうなのです。

鳥根県には石見と出雲と隠岐がありまして、石見、出雲がそれぞれ2つに別れていますから、5つの教育事務所に別れています。困ったことに、出雲出身者が大半なのです。人口が3対1くらいですかね。それで出雲の人間が必ず石見に行かなければならない。そうでないと教育がまかなえないですね。そこで、へき地点という言葉があるのです。異動のルール上教員は一生の間にへき地点を取らないといけないのです。若い時に取らなければいけないし、管理職になる時にまた取らなければいけない。管理職になっても1回はへき地に行かなければいけない。こんなルールが複雑に絡んでいるので単純には言えません。

新任の先生も小学校で言うと25人か30人です。ところが非常勤講師の先生はもっとたくさんいて既にへき地にも行っています。正式採用ではありませんから、穴が開いたところにみんな行きますので50人も100人もいます。非常勤講師は170人いますから。そうするとその中には新任の講師もいるわけで、お構いなくへき地校に配置されます。正規の採用だけが出身地域には配置しないのが原則だったんです。

最近また異動ルールが変わりまして、最初は自分の出身地域に置くというように変わっています。そして3年くらい経てから更にその管内の中で別の学校に行く。大きい学校にいて、次は事実上へき地校と言うかそれより小さい学校に行く。

これは原則ですが、今皆さんが教員研修のライフステージの中でどういう意味を持つのかという論議をされていますが、むしろ研修という意識も勘案されながらも、人の数の調整というか教員人事の異動ルールが複雑に絡んでいるので、理想と現実の絡み合いの中で教員が動かされると言えるのではないかと思っています。

**永澤：**大まかなプログラムはこちらの方にありますが、実際の運用にあたりましては、各教育局管内で行っておりますので、道立教育研究所よりも、具体的な状況ということで佐野先生の方からお願いいたします。

**佐野：**初任者研修について、ほとんどの県は研修センターで研修をされている様ですが、北海道では棲み分けしています。先ほど質問がありました、複式教育に関わってどういう指導実態があるのかという点ですが、14教育局の管内状況も、有馬先生のお話と似たような所があります。管内によって若干状況も違いますが、基本的には校内研修の中で複式指導に関しては指導されている事になっています。管内によって、例えば空知管内のように複式学級が多い管内もありますの

で、そういう地域では一般研修の中で所属の学校規模に応じて研修するという工夫を、教育局は取り組んでいます。ですから、何らかの形で複式教育に関わる研修は実施されています。

**吉田：**私はあまりこだわる性格では無いのですが、話し合いがどうしても1点だけに集中してしまいました。この問題を提出していただいた進藤先生に、今までのお話を聞いてどう思われたかをお聞きして、それから村田先生の最後のご挨拶があるのでしょうか。

**進藤：**同じへき地複式小規模校教育と言っても、沖縄、北海道、島根と状況がかなり違うことが大変よく分かりました。ただ、私は北海道で20年になりますが、どうしても「へき地複式校に行かされる」という意識が気になります。この北海道教育大学岩見沢校はへき地複式教育実習もやり、学生達を育てているのに、卒業生の中にもそうした意識が出るということは一体なぜなのか。どうしたらそうではなくなるのかを考えているわけです。北海道全体の都市部の学校と田舎の学校を総て視野に入れて、自分が北海道で教員としてのライフステージを歩んでいこうとするには、どのようにあったら良いのかということが問題意識にあったものですから、質問させていただいたのです。

ちなみに私の娘も4年、5年、6年と5級と4級のへき地で3歳の子育てをしながら教員をしています。その3歳の子供は問寒別と岩見沢と札幌に家がある。パパは札幌で、岩見沢は私の家なのですが、どこが一番好きかと3歳の子供に聞くと、問寒別が一番好きと言います。母親は保育所に預けながら問寒別の学校に勤務しているわけです。親はどうしても札幌志向があるわけですが、それも何となく分かる気がするのです。そういう娘の価値観とはいつも対立するものですから、どうやったらそういうことを乗り越えられるのかなと頭から離れないのです。そう一筋縄で行かないことも今日は良く分かりました。

**村田：**どうしてもこういう問題になるということは、このテーマを設定した時から私も考えておりました。いろいろとへき地教育に関わって学生や先生方と話していると、個人のレベルではこういう話をいっぱいできるのです。でも、やはり公の場ではもう一つの課題がありますからなかなか出てこない、できないというのが事実だと思います。けれども、へき地を含むこれからの北海道教育を考えた時、やはり制度とかシステムをどこからどういうように動かしていくかについて、大学だからこそ議論ができるということで、この場を作りたかったのです。先生方にはいろいろ申し訳なかったと思っておりますけれど、でもやはり今後ももう少し話し合っていきたいなという気持ちです。その中で、へき研として、私達のできる研修の機会をバイキング方式や懐石で行くかなど、考えて行きたいと思えます。

**吉田：**時間になってしまいました。司会の方の時間配分の拙さで、全体像に広げることができなくて、折角お出で頂いたのに発言して頂けない先生方が大変多かったことをお詫びいたします。終わりに当たりまして、発表して下さった先生方に拍手を頂きまして、この討論を閉じさせていただきます。ありがとうございます。